

むら芝居でみんなを元気に

全国の素人芝居劇団が集まり、その演劇を披露する「全国むら芝居サミット」が10月28日、日高文化体育館で開催されました。

台風23号の惨劇を乗り越え、大好きなむら芝居の活動を再開し、サミット誘致を実現させた一人の男性を紹介します。

高階 正夫さん (56歳) 日高町宵田在住



▲「水戸黄門」や「国定忠治」など、これまでに発表した芝居は10を超える

昔懐かしい

むら芝居を復活

かつて農村集落で成年たちによって演じられていた、昔懐かしいむら芝居。そんなむら芝居を復活させ、「元氣」をキャッチフレーズに地域の活性化に取り組んでいるのは日高町の「宵田一座」の皆さんです。

座長の高階さんは、「子どもころのころに見た、あの懐かしいむら芝居をやってみたい」という思いで、平成2年、途絶えていたむら芝居を近所の知人と4人で復活させました。4人が最初に選んだ舞台は、地区の演芸会です。経験や技術もない素人の演劇でしたが、観客の意外なほどの歓声に手応えと達成感を感じました。



▲自動車販売店を営む傍ら、宵田一座の座長を務める高階さん。芝居以外に旅行やスキー、バイクツーリングも趣味とする行動派。

これを機に、一座はすっかり芝居にやみつきになり、団員も増えて13人。以後、毎年11月に開催される日高地区文化祭に積極的に参加し、押しも押されぬ名物演目の一つになっています。

気持ちまで奪った

台風23号

一座はこれまで、さまざまな課題を乗り越えてきました。2年前に台風23号が襲来した際に、団員の自宅だけでなく、むら芝居用の道具も被害を受けました。この惨劇を目の当たりにした団員は、道具と同時にむら芝居を継続していく気持ちまで失いました。しかし、全国から寄せられたさまざまな支援や励ましの

声に、高階さんは再びむら芝居を続けていこうと決意しました。団員の強い後押しを受けながら、道具を一つひとつ作成し、あの惨劇から1年が経過して開催された、日高地区文化祭で再出発を果たしました。

観客との一体感が

たまらない

一方、一座は、県内を中心に、東北や九州など各地の素人劇団で組織する「全国むら芝居ネットワーク」に加盟し、活動の輪を広げています。今年10月末には加盟団体が

集まり、それぞれの芝居を披露する「全国むら芝居サミット」を地元で誘致しました。高階さんは、「被災後に全国から寄せられた励ましが忘れられない。少しでも恩返しをしたい」という思いで、サミットの実行委員長を務め、開催までの準備を進めました。サミットでの一座の出し物「円山の鮎太郎」は、合併や水害、堤防の建設など、地区が直面している議題を盛り込み、コント調に仕上げました。観客との掛け合いも絶妙でお

ひねりも飛び交い、大変な盛り上がりを見せました。「こんな雰囲気はたまらないですよ」と高階さん。一座にとって、観客との一体感が活動の励みになっています。

むら芝居を通じて

心のつながりを

むら芝居サミットを成功させ、地域発展の手応えを感じた高階さんは、「私にとってむら芝居とは、仲間づくりの大切な場です。むら芝居を通じて全国に親しい仲間ができました。また、地域の方々と交流も盛んになり、毎日楽しい生活を送っています。今後も、私たちがそうだったように、子どもたちの記憶に残るような昔懐かしいむら芝居を1日でも長く演じたいと思います」と、くったくのない笑顔で話していました。



▲新作「円山の鮎太郎」は観客の心をわしづかみにした